

歴史的かな遣いに気をつけて、登場人物や作者の思い、情景などを想像しながら朗読しましょう。

猫又

「奥山に、猫またといふものありて、人を食(くら)ふなる」と人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経(へ)上(あがり)て、猫またになりて、人とる事はあなるものを」と言ふ者ありけるを、何(なに)阿弥陀仏(あみだぶつ)とかや、連歌(れんが)しける法師の、行(ぎやう)願寺(ぐわんじ)の辺(ほとり)にありけるが聞きて、独り歩(あり)かん身は心すべきことにこそと思ひける比(ころ)しも、ある所にて夜(よ)更(ふ)くるとまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川の端(はた)にて、音に聞きし猫また、あやまたず、足もとへふと寄り来て、やがてかきつくままに、頸(くび)のほどを食はんとす。肝(きも)心も失(う)せて、防(ふせ)がんとするに力もなく、足も立たず、小川へ転(ころ)び入(い)りて、「助けよや、猫またよやよや」と叫べば、家々より、松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こは如何(いか)に」とて、川の中より抱(いだ)き起(おこ)したれば、連歌の賭(かけ)物(もの)も取(と)りて、扇・小箱など懐(ふところ)に持ちたりけるも、水に入りぬ。希有(けう)にして助かりたるさまにて、這(は)ふ這(は)ふ家に入りけり。飼ひける犬の暗(くら)けれど、主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。

徒然草より

【現代語訳】

「奥山に猫またという物がいて、人を食うそうだとある人が言ったところが「（いや、）山でなくてもこのあたりでも、猫がひどく年を取って、猫またになつて、人をとって食うことはあるそうだよ。」と言者があつた。それを何とか阿弥陀仏といった連歌を（職業）としていた法師で、「（自分のように）一人歩きする者は、気をつけなければならぬことだ。」と思つていた、ちやうどそのころ、ある所で、夜が更けるまで連歌（の会）をして、ただ一人で帰つてきたところ、小川のふちで、うわさに聞いた猫またが、まっすぐにあしもとへつと寄つてきて、いきなり飛びつくと同時に、首の辺りに食いつこうとする。（法師は）びっくりして正気もなくなり、防ぼうとしたが力も出さず、（腰が抜けて）足も立たず、小川へ転がり込んで、「助けてくれ。猫まただ、助けてくれ、助けなくてくれ。」と叫んだので（辺りの）家々から松明をともして、走り寄つてみると、この辺で顔見知りの僧である。「これは（いったい）どうしたことだ。」と言つて川の中から抱き上げてみると、連歌（の会）の賞品をとつて、扇や小箱などを懐に入れて持つていたのも、水びたしになつてしまつた。不思議にも（命が）助かつたというようすで、はうようにして家に入つたのであつた。（実はこれは）この法師の飼つていた犬が、暗くても飼ひ主を見知つて、飛びついたのであつたことだ。

問一 歴史的かな遣いの部分に線を引きましょう。
その部分に注意して正しく音読しましょう。

問二 難解な語句や古語の意味に注意して、文章の
おおよその内容を書きましょう。

問三 どんなどころがおもしろいか書きましょう。